

憲法改正が政治日程のぼって来た。小泉首相が菅代表に、「一緒に改正をやろう」と声をかけた。菅代表は取りあわなかったが、民主党も独自に憲法改正を考えるつもりだ。

▲公明党がこのまま政権与党に存在し続けられ、あらゆる改革は公明党の反対によって足して二で割る…水で薄められたわけのわからないものになる。中西論文は、自民党と民主党の大連立を提案する。▲政権交代可能な二大政党制に移行する直前に、いずれの国でも大連立政権が誕生しているから。それには、完全小選挙区制、憲法改正(九六条の憲法改正事項を改正

公明党と自民・民主大連立

す。)、年金・財政・安全保障の大枠についてだけ合意し、短期の大連立を組んで改革をなす必要があるとする。

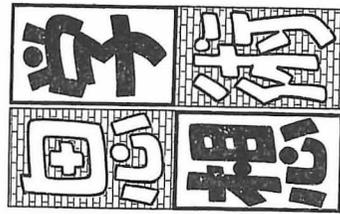
魚住論文は、もともと反学会だった野中広務元幹事長が、公明党と太いパイプを持つことで権力基盤を固めて行った舞台裏をつぶさに描き出す。小選挙区制になって公明野の議員たちが「裏欲しさに学会詣でを繰り返すようになった」のが、その背景である。その野中氏が引退して、小泉首相は「大連立カード」を手にするかたちになった。

少数政党の公明党に両大政党がふり回される現状が、日本の民主政治のためによいことなのか。大連立は一考に値する。

<私のお勧め>

- ①自民と民主は大連立せよ (中西輝政) =文芸春秋2月号
- ②野中広務「権力二十年戦争」——創価学会を「折伏」させた胆力の光と影 (魚住昭) =現代2月号
- ③公明党が自民党を見限る日 (早坂茂三) =Voice2月号

橋爪大三郎 (東京工業大学教授・社会学)



橋爪大三郎著

言語/性/権力

橋爪大三郎社会学論集

「社会学のおい」(序章) 橋爪氏の構想する理論社会学は、これに『言語派社会学の原理』(津島社)や『社会学専攻の若手たち』(早稲田大学出版部)に収められている。最近の社会学の教科書ではほとんど見られないが、中絶に近いが、かつて社会学の教科書の定着は「社会学の創始者」コンラート・ゲオルク・オットーの『社会学の原理』(1914年)と唯物論的・社会有機体説や社会進化論、政治社会学、理解社会学などといった記述が豊富に記述される。社会学のすべてを説明し、社会学という学問の歴史を、それが「社会学のおい」である。

本書は、橋爪氏が2000年までの間に、理論社会学の領域で発表した論文をまとめたものである。内容的には多岐にわたる(第一部「言語と社会をめぐって」(第一部「規範の言語と権力の生成」(第一部「交際する社会関係」)、それだけ独立した論文であるが、そこには「社会学のおい」に導かれた体系的な構想がある。

本書は、橋爪氏が2000年までの間に、理論社会学の領域で発表した論文をまとめたものである。内容的には多岐にわたる(第一部「言語と社会をめぐって」(第一部「規範の言語と権力の生成」(第一部「交際する社会関係」)、それだけ独立した論文であるが、そこには「社会学のおい」に導かれた体系的な構想がある。

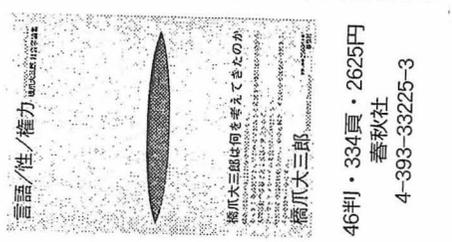
本書は、橋爪氏が2000年までの間に、理論社会学の領域で発表した論文をまとめたものである。内容的には多岐にわたる(第一部「言語と社会をめぐって」(第一部「規範の言語と権力の生成」(第一部「交際する社会関係」)、それだけ独立した論文であるが、そこには「社会学のおい」に導かれた体系的な構想がある。

「人類的演習論」(「地味ではなく、理系の社会を下演劇」(第四回)という論考がある。すでにその中に言語を基礎に据えた理論の構築の萌芽が見られるように思う。人間を人間たらしめるものとして言語もある。この演習論の意図は言語派社会学のなかにも脈々と受け継がれている。それが「社会学のおい」でもあつた。

この「人類的演習論」は言語の特性を話す「誰か」と捉えている。そこから見えるものに、陳腐な論理構成を脱却して、その後、言語派社会学の構想が明確になるにつれ、陳腐な論理構成は否定され、記号的な権威に代わられる。もちろん、そこにはシニールな語りや語り手、アローの語り分け、らわげイット、シニールの言語ゲームのアイディアの出会いがあったのであり、橋爪氏としてのいわば「言語派の転回」があったに違いない。その区別は本書の第一部、言語と社会の関係をめぐる議論から聞き取ることができ

構造・機能分析以降、社会学における理論のライターの歴史の中では、群を抜いて包括的プログラムを構想しているのはこの言語派社会学の構想であろう。本書は、この言語派社会学の構想に従って書き進められた論文であり、言語派社会学の生成と展開過程を

演習の出発に語られることがある(ただし、「役割」概念などはその最も定着したものである)。しかし、橋爪氏によって演習は出



橋爪大三郎は何を考えたのか
言語派社会学の生成と展開過程を
橋爪大三郎著
46頁・334頁・2625円
春秋社
4-393-33225-3

言語派社会学の構想

群を抜いた包括的なプログラム

橋爪大三郎

芥川賞の二作品が話題だ。金原ひとみの「蛇にピアス」は、主人公の私がピアスを入れ墨にのめりこむ。綿矢さきの「蹴りたい背中」は、オタクの同級生の背中に蹴飛ばしたくなる。読んでみて、どうでもよいように感じたり、はかり書いてあると思ったり。政治も経済も世の中の動きも見当たらない。世界が狭いという評があったが、その通りだ。だが、その通りだ。だが考え直すところ、こうしたいまじまじとたことからは、著者たちが確かな手応えで描ける唯一の世界なのだ。身体改造」といった生理的・感覚的なテーマも、それを象徴する。他者から見ればどうでもよいようなこと

「狭い」世界が時代を開く

が、本人にとっては切実な問題。そうやって誰もが孤立している。その状況を忠実に構成した必死で真剣な作品と読める。

こういう作品を世間は、フリーターやひきこもりと結びつけ、だから最近の若い者は…とひとへんに蔑みます。著者たちは、そこをわかったうえで、あえて年長世代に対し、状況の中で孤立し追い詰められた若者という「オタク」を選択しているのではないか。

かっこいいよ、ハ、クリスタル」という、どうでもよいことばかりを描いた小説があった。いま著者は知事として大状況と格闘している。小説の表層はどうでもよい。確かな筆力が時代を開いていくのだ。

<私のお勧め>

- ①インタビュー 生きづらさを形に (金原ひとみ) =すばる3月号
- ②特別対談 イノセンスの先へ (綿矢りさ、藤沢周) =文学界3月号
- ③第130回芥川賞発表 蛇にピアス 蹴りたい背中 (金原ひとみ、綿矢りさほか) =文芸春秋3月号

橋爪大三郎 (東京工業大学教授・社会学)

入 書 誌 列 週

本書は、橋爪氏が2000年までの間に、理論社会学の領域で発表した論文をまとめたものである。内容的には多岐にわたる(第一部「言語と社会をめぐって」(第一部「規範の言語と権力の生成」(第一部「交際する社会関係」)、それだけ独立した論文であるが、そこには「社会学のおい」に導かれた体系的な構想がある。

第2547号

2004年(平成16年)7月30日

雑誌を読む

3月

- ◆「イラク戦争」の一年を読む——開戦後三六六日の歴史的意味 (立山良司) =フォーサイト4月号
- 流動化する中東の現況。国連の関与広がるイラク復興
- ◆九六年以後——大統領選がつくってきた台湾独立世論 (若林正文) =中央公論4月号
- 政治エリートを再編しナショナリズムに傾斜する民意
- ◆プッシュのライバル達とイラク問題 (渡部恒雄) =論座4月号
- 超党派外交の伝統。イラク政策に大きな変化見込めず
- ◆「世界無秩序」克服への道 (ユルゲン・ハーバーマス) =世界4月号
- 米政権の国連軽視と国際法無視。市民への脅迫と洗脳

流動化するイラク戦後

橋爪 大三郎 (東京工業大 教授・社会学)

3月11日マドリッドで、通勤電車に仕掛けられた爆弾が、つぎつぎに爆発、200人が死亡した。アルカイダの犯行と疑われている。直後の総選挙では与党がまさかの大敗を喫し、親米アスナール政権は退陣へ。テロはまんまと目的を達したかたちになった。

係がぎくしゃくしていった。イラク戦争後、世界が急速に流動化している。テロが国際化するなか、各国の政局やさまざまな事件が連動し、ひと筋縄では解けない複雑な様相をみせている。▲イランが二十五年ぶりにエジプトとの関係修復に乗り出した。



立山 良司氏



若林 正文氏

廃棄を宣言、パキスタンの核開発が中国やイラン、北朝鮮とつながっていた事実も明らかになった。イラク戦争は確実に、関係諸国の力学を変化させている。北朝鮮も追い詰められている。6者協議での拉致・核問題に関心

ナル・アイデンティティ、台湾独立か中国統一かについての重心が、台湾独立支持のほうにすでに動いた、という議論が興味深い。前回の総選挙は、独立統一が伯仲するなか、国民党陣営が分裂したので陳水扁が漁夫の利をえた。

論文。だがこの秋の選挙結果は予断を許さない。民主党が政権を奪回する可能性も高い。大量破壊兵器はみつからず、テロも収まらず、イラク安定の道筋も見えない。民主党政権の誕生を見越して、これ以上プッシュ政権に協力すべきでないとの意見もある。だが▲アメリカの政権交代を判断基準として、自衛隊のイラク派遣を決める態度は、日本として主体性のあるものではない▼(渡部論文) だろう。

連動するテロと政局

理想から逸脱する米国 日本は戦略練り直しを

シリアも長年対立してきたトルコとの関係改善に努めている。反米、反イスラエルの二方面が、反対の極にある二方面との関係強化に乗り出し、中東の域内関係が新たな調整段階に入った▼(立山論文)。リビアが大量破壊兵器

が集まっているが、朝鮮半島はむしろ台湾海峡と連動する、と中西論文が指摘する。最近公表された資料で、周恩来が▲第七艦隊を派遣して台湾の武力解放を阻んだアメリカへの▲対抗策が朝鮮戦争への参戦であった▼と、ニクソン大統領にのべていたことが明らかになった。6者協議を仕切る中国は、▲北朝鮮の核放棄を条件に、台湾問題での日米の譲歩を迫ろう▼と考えている。▲問題を自らつくり出しては…解決に協力するふりをして…恩を売るといふ戦略▼なのである(中西輝政「台湾は日本の生命線だ」Voice 4月号)。

今回は▲ナショナル・アイデンティティ問題で…民進党に追随し▼(若林論文) た国民党の統一候補を破ったわけで、民意がいっそうはっきりした。同時に初の「住民投票」も実施、独立を問う投票がいつでもできるようになって、中国は神経をとがらせている。

開戦から一年、アメリカの世論も流れが変わってきた。民主党のケリー氏が予備選を制し、プッシュに勝てる候補として登場した。▲支持率の下落傾向が続くなら、ケリーに対応するため、プッシュ政権の政策のベクトルが、ネオコン・保守ラインから、中道現実派ラインへシフトし、より国際協調的なプッシュをアピールするといふことも、考えられ▼る(渡部

台湾情勢については▲「主流位移」論▼、つまり▲台湾のナシヨ

調的なプッシュをアピールするといふことも、考えられ▼る(渡部

論文)。だがこの秋の選挙結果は予断を許さない。民主党が政権を奪回する可能性も高い。大量破壊兵器はみつからず、テロも収まらず、イラク安定の道筋も見えない。民主党政権の誕生を見越して、これ以上プッシュ政権に協力すべきでないとの意見もある。だが▲アメリカの政権交代を判断基準として、自衛隊のイラク派遣を決める態度は、日本として主体性のあるものではない▼(渡部論文) だろう。